

の麓で人は安らかに暮してゐる。彼等は平和に生き、平和に死んで行く。太陽は彼等の上に輝き、愛は彼等の心を温める。しかし、彼等のやうにして生きる爲めには、忿怒と剣とを要しない……そして私はヴァニアを思ひ出す。恐らく彼が正しい、が、雪白の僧服は私の爲めではない、キリストは私と共にゐない。

九月十六日。

「なぜあなたは常も鬱いでゐるの？」とエレーナは訊ねた。「わたしあなたを愛してゐなくつて？ 御覧なさい、あなたに眞珠の贈物を上げてよ。」

彼女は自分の指から指輪をぬいた。大きな眞珠が、金の輪の中に、涙のやうに光つてゐた。

「大切にしてね……それはわたしの愛なのよ。」

そして彼女は私を抱擁した、

「わたしがあなたの妻でないから、悲しいの？ でも、結婚は習慣になつた愛で、輝く閃めきのない退屈な愛だと、わたし思ふわ。わたしあなたを愛したいの……美と愛が欲しいの……」

彼女は思ひ沈んだやうに附加へた、

「何故人は文字を書いて、文字で言葉を作つて、言葉で法則を作るんでしやう？ 図書館はこんな法則で一杯になつてるのね。生きてはならぬ、愛してはならぬ、考へてはならぬ。ほんの一日にさへ、何かしら『ならぬ』があるのね……馬鹿々々しい、たわけたことぢやないの？ 何故わたしはたつた一人だけ愛さなければならぬの？ ねえ、何故なの？」

再び私は返事をしなかつた。

「あなたは答へることが無いのですね、ジョーチ、あなたはさう答へていゝか知らないのね。あなたはわたしより前に、誰も愛さなかつたと云へて？」

私は攪き亂された。私は確かに一人以上の女を愛し、嘗て法則の要を信じなかつた。彼女は自身の手を繰り返してゐるのだ。然し今私は、その言葉が虚偽だと、感じた。そして私はそれを彼女に云ひたかつたが、云はうとしなかつた。

彼女の重い黒い編んだ髪が、肩に落ちかゝつて、ばらつとした髪の黒い枠の中で、彼女の顔がいくらか青白く瘠せたやうに見えた。彼女の眼は私の答を待つてゐた。

私は黙つて彼女に接吻した。私は、彼女の無邪氣な手、強い若々しい體に接吻した。彼女に接吻することは、私には苦みであつた。私のしたやうに彼女に接吻し、彼女が愛してゐる、彼についての循環的な考へによつて、私はまた催眠をかけられた。そして私は云つた。

「否、エレーナ、それではいけない。彼が僕かでなければ……」
彼女は笑つた。

「そこなの。するとわたしは奴隷になつて、あなたは主人なのね。それでわたしがごちらと選ぶことがいやだつたらどうなの？ 何故わたしは選ばなければならぬの？ 聞かせて頂戴。」

雨が窓の外に騒がしく落ちてゐた。ほの暗い光りの中で、彼女の輪廓を見た。大きなその眼は、夜のなかで黒く輝いてゐた。私は青褪めて云つた。

「それが僕の望です、エレーナ。」
彼女は沈黙してゐた。顔が悲しさうになつた。

「選びなさい！」と私は云つた。
「あなた、わたし出来ないの……」

「僕はあなたに選ぶことを求めます。」

彼女は急に椅子から立つて、確りした口調で、靜かに云つた。「わたしあなたを愛してゐますの、ジョーヂ、それはあなたも御存じね、でもわたしはあなたの妻にはなりませんの。」

彼女は去つた。私は獨りで残つた——旅女の眞珠だけが私の手にあつた。

九月十七日。

エレーナは自らの美しい肉體、若い生命を愛してゐる。そう云ふ愛には自由が在るかも知れない——人は在ると云ふ。併し私はそれを氣にかけない。エレナが奴隷で私が主人でもよい。私が奴隷で彼女が自由でも……たゞ私がつきりと思つてゐることは、私は彼女の愛を誰とも別けて持ち度く無い、と云ふことである。誰か、彼女に接吻するなら、私は彼女に接吻が出来ない。ヴァニアはキリストを求め、エレーナは自由を求める。この私は、何ものも求めない。キリストにしる、反キリストにしる、ディオニサスにしる——私は意にしない。私は彼女を自分のものにしたいと欲してゐる。そして私の欲求は私の權利だ。

深紅な花の匂ひがまた私を陶醉させてゐる。不思議な靈感がまた働いてゐる。私は砂漠の中の一つの石のやうだ。が、私は手に鋭い鎌を持つてゐない。

九月十八日。

昨日は私の豫想してゐたことが起つた。が、秘めて望んでゐたことは遂に起らなかつた。哀しくつて辱かしい日であつた。私は大通りを歩いてゐた。乳のやうな霧が匍ひ上つて、闇黒の波の中に溶け込んでゐた。

私は、何の標もなく、何を考へるでもなく舵を失つた漂流船のやうに、歩いてゐた。不意に霧の中の一點が濃くなつて、ぼんやりした影がふらふらと動き出して來た。一人の軍人が激しく私の方へ歩いて來たのであつた。彼は私を見て立ち停つた。私はちつと彼の眼を凝視つた。黒い瞳に忿怒を見ることが出來た。私はそつと彼の腕をとつて云つた。

「僕は長い間君を求めてゐたんですよ。」

私達は黙つて街を歩いて行つた。私達は長い間暗い霧の中を歩いたが、二人共そこを歩いてゐる

るのか知らなかつた。そして私達は、兄弟のやうに、お互にびつたり寄添つてゐるのを感じた。私達は公園へ入つた。

秋が深かつた。技々は裸で——獄舎の格子のやう。霧は消えて、草は霧でびつしより濡れてゐた。枯樹と蘚こもの匂ひとがあつた。

公園の奥の、茂みのなかに、私は道を選んだ。私は切株に腰を下して、冷やかに云つた。

「僕が誰だか御存じですか？」

彼は黙つて肯づいた。

「何故、僕がこゝに來てゐるかを御存じですか？」

彼は再び肯づいた。

「僕はこゝを去らうと思つてゐないことも、君に云はなければなりません。」

彼は輕蔑むやうな微笑を持つて云つた。

「それは確かですか？」

確かであつたか？私は知らない。エレーナの愛してゐるのは誰か、だれがそれをはつきり分つ

てゐたか？が、私はかう云つただけであつた。

「そして君は？」

沈黙があつた。それから私は云つた。

「時にね。君が去らなければならぬよ。分つてゐますか？ 君は。」

彼は忿怒が激發して赫くなつた。が、彼は冷やかに云つた。

「君は狂人だ。」

それから私は黙つて拳銃を取出した。草の上を八歩測つて、濡れた小枝のある棚をねらつた。

彼はぢつと私を眺めた。私が放つて了ふと、彼は微笑を浮べて云つた。

「君は決闘をお望みですね？」

「僕は君の去るのを求めます。」

髪の綺麗な、すらりとした彼は、私の眼を直視して、皮肉に返繰した。

「君は狂人だ。」

沈黙の後で、私は訊いた。

「決闘しますか？」

彼は短銃挾を開いて、不承無承に、彼の短銃を取出した。ちよつと躊躇したあとで、彼は云つた。

「よろしい……御望みに應じましよう。」

すぐ彼は、定められた彼の場所に就いた。私が十歩の距離で骨牌の一點を打當てることの出来るのを、私は知つてゐた。この時、標的を外すやうなことがある筈はなかつた。

私は短銃を舉げて、黒い標的——彼の外套の釦——を狙つた。私は待つてゐた。一寸間をおいて、私は高い聲で云つた。「……」

彼は沈黙してゐた。

「二、三、」

彼は、胸を前へ衝出して、短銃をぶらりと下げて、動かずにゐた。彼はそれを舉げやうとしなかつた——彼は明らかに私を嘲弄してゐた……熱した、堅い塊が不意に私の咽喉を扼した。私は烈しく叫んだ。

「打て！」

彼から何の響も来なかつた。それから、急に嬉しくなつて、私は徐ろに引金を引いた。黄色い一閃があつて、白い煙が地を匍つた……

私は濡れた草の上を歩いて、骸のところまで止つた。彼は冷い柔かい泥に顔をつけて、道に仆れてゐた。腕を不格構に曲げて、脚を廣く開いて伸してゐた。糠雨が降つて居た。霧罩めてゐた。私は森の茂みの方へ曲つた。夜がやつて來た。樹の下は眞の闇であつた。私は、舵を失つた船のやうに、標もなく歩いた。

九月二十日。

對島海峡の海戦で多くの人々が溺れた。夜は闇黒で、海は霧に包まれ、波は高かつた、戦艦は、奇怪な巨大な傷いた獣のやうに、隠れてゐた。黒い煙筒さへ見え、大砲は沈黙してゐた。晝は戦ひ、夜は攻撃から逃れた。數千の眼が闇を見張つてゐた。すると不意に唸りが起つた——驚い

た海鷗の呼び聲のやうな、「水雷艇が跟けてゐるぞ……」探海燈が白光で夜を眩まして、輝き渡つた。それから……甲板に居た者は誰でも、海中に飛び込んだ。甲鐵の裏の、内部に居た人々は、艙口に衝き進んだ。短艇は、艙を水に浸して、沈み始めた。機械室に居た機關手達は、囊のやうに轉げ落ち、鐵鎖は彼等を打ち、車輪は彼等をハツ裂きにし、煙は彼等を窒息させ、蒸汽は彼等を焦した。そのやうにして彼等は、誰も彼もみんな、亡くなつて仕舞つた。波浪は大きくうねつて、艦側を打ちつづけた。……無感覺な、名狀すべからざる死。

それからまた他の種類の死がある。北方の海北方の暴風を想像せよ。風は帆を一抔に張らせ、海を激しく打つて、白く泡立ててゐる。一隻の漁船が灰色の波の上に漂つてゐる。灰色の日は青ざめた日没に溶け込む。燈臺の閃が遠いところに現れる——始めは赤く、それから白く、また赤く。人々は船首に身動きもせず、綱にしつかりと緊扼しごみついてゐる。波浪は吼え、雨は飛沫く……その時不意に、風の唸りを透して、靜かに鳴る鐘が聞える。鐘は水中に在つて、小舟の低い脇腹を打つて、鳴つてゐる。それは浮標鐘だ。砂堤にぶつかつたのだ。それは死を意味する……それからまた其處には、風と、空と、波浪とがあるが、人々は最早見られないのだ……

こゝにまた他の死がある。私は一人の人を殺した……早い頃私は、理想の爲めに殺してゐるのだ、と云ふ辯解をしてゐた。日本人を沈めた人々は、私がしたと同じに、露西亞が彼等の死を要すのだ、と理由をつけてゐる。併し今、私は私自身の爲めに人殺しをした。私は殺したかつた、で、殺した。審判^{サウダ}く者は誰か？ 私に罪があると誰が審判くであらうか？ 誰が私を辨護するであらうか？ 私は私を審判く者、彼等の冷酷な宣言を蔑視んでゐる。私のところへ来て、純な信仰を以つて、「汝殺す可からず」と云ふ者は誰であらうか？ 誰が私に石を投げやうとするであらうか？ 何の確たる區別も、差違も、そこには無い。理想の爲め、國の爲めに殺すのが正しくて、已れ自身の爲めに殺すのがさうでないか？ 私に答へて呉れる者は誰か？

私は窓の外を見る。またく星、きら／＼する大熊星、天の川の銀色の流れ、金牛宮の群星のかすかな光が見られる。それらの後に何があるか？……ヴァニアは信仰を有つてゐた。彼は知つてゐた。併し私は唯獨り立つてゐて、夜は不可解に沈黙してゐる。大地は神祕的に呼吸し、星は謎のやうに輝いてゐる。私は困難な道を歩いて來た。何處が終りか？ 私の得るに足る安息は何處にあるか？ 血は血を生み、復讐は復讐によつて生きてゐる……私の殺したのは、獨り彼だけでは

ない……私は何處へ行くのであらうか？ 何處へ飛去るのであらうか？

九月二十二日。

朝から雨が降つてゐる——しと／＼と降る秋の雨だ。私は蜘蛛の網のやうな雨のなかを眺めてゐる。疲れた思ひが、点滴のやうに退屈に私を攪き亂す。

ヴァニアは生きてゐて、死んだ。フェドルは生きてゐて、殺された。知事もまた、生きてゐて、いまは居ない。……人々は生きて、そして死に、……新しい人々が生れる。彼等は生きて、死ぬ……天空は陰鬱で、雨が流れとなつて注いでゐる。

私は悔まない。さうだ、私は殺した……私はいまエレナに何の渴望も感じない……私の人殺しの發砲が、私から私の愛を焼き去つて了つたらしい。私は彼女の悲みには無關心だ。彼女は何處にゐるか、何をしてゐるか、私は知らない。彼女は彼女の失つたもの、彼女自らの生活を敷いてゐるか、それとももう忘れて仕舞つたか？ 彼と私再び彼！ 私達は今でもお互に鎖でつながれてゐる。

雨脚が繁くなつて、鐵の屋根の上に騒音を立てゝゐる。ヴァニアは、愛なくして人はさうして生き得るか？ と云つた。そう云つたのはヴァニアで、私ではない……おゝ否、——私の血の仕事をした……私は再び私の仕事を始めやう。私は、日に日を次いで、退屈な時に退屈な時を次いで、見張つて間喋をしやう。私は死によつて生きやう。ある日が酔はずやうな歡びを持つて來るであらう。その時には私は、私の目的を就けて——勝利を得て——ゐるであらう。それが、斷頭臺へ行く迄の、墓へ行く迄の、私の生活であるであらう。

併し、人々は私を讚美し、私の勝利を聲高く祝福するであらう。彼等の忿怒、彼等の憐む可き歡びは、今私にとつて何であるか？……

乳白色の霧がまた町を覆ふた。煙突は沈鬱に衝立ち、長く引張つた汽笛は工場から來る。寒い闇黒が匍ひ上つてゐる。雨はまだ降つてゐる。

九月二十三日。

キリストは、殺す勿れと云つた。そして彼の使徒ペテロは殺すために劍の鞘を拂つた。キリス

トは、お互に愛し合へよと云つた。そしてユダは彼を裏切つた。キリストは、われは世を審判かんが爲めに來れるに非ず、世を救はんが爲めに來れるなり、と云つた。そして宣告は彼の上に下された。二千年前、血で呼吸づきながら、彼は禱つた。そして彼の使徒達は眠つてゐた。二千年前、人々は「彼をとりて十字架に釘けよ」し、彼に紫色の外袍を着せた。そしてピラトは、「われ汝等の王を十字架に釘くべけんや？」と云つた。併し祭司の長等は「カイゼルの外にわれらに王なし」と答へた。

そして今、ペトロは彼の劍の鞘を拂ひつゞけて居り、アンナスはシアハスと共に審判くことをつゞけて居り、シモンの子ユダは裏切ることをつゞけてゐる。そして私達は古のやうにキリストを十字架を釘けることを續けてゐる。

併し、若しさうであるなら、彼は葡萄樹でなく、私達は枝でない。それから彼の言葉は地上の器に過ぎない。するとヴァニアは間違つてゐた……哀れな、愛すべきヴァニア……彼は生のは認を求めてゐたのだ。何故是認する必要があるか？

フン族は畑を踏み通つて、若い芽生えを踏みにぢつた。青ざめた馬は草の上を歩いて、草は枯

れた。人々はその言葉を聞いた——その言葉は不浄された。

ヴァニアは信仰を有つて、「世界は剣によつて救はれず、愛によつてのみ救はれる——そして愛が支配するであらう。」と書いた。それでもヴァニアは人殺しをした。彼は「人と神とに對する最大なる罪を犯した。」私が若し彼の信仰を有つてゐたら、殺すことが出来なかつたであらう。そして、私は人殺しをしたのだから、彼が考へたやうには考へることが出来ない。

ハインリヒにあつては、彼は謎に苦しみはしなかつた。彼にとつて世界は、アルハベットのやうに簡單だ。一方に奴隷があつて、一方に主人がある。奴隷は主人に反抗する。奴隷が殺すのは正しい。奴隷が殺されるのは間違つてゐる。奴隷が征服するの日が来るであらう。その時は、地上に樂園が出来るとあらう。すべての人は平等で、すべての人は良き糧を與へられ、すべての人は自由であるであらう。立派だ、實に。私は地上の樂園を信じないし、天上の樂園も信じない、私は奴隷、自由奴隷であることさへ、欲しない。私の生命は衝突であつた。私はそれなしで存在することは出来ない。併し、私の衝突の目的は何であるか？ それは私は知らない。それが私の願望だ。私はわらない私の酒を飲む。

九月二十四日。

私はまた宿屋にゐる。技師マリノズスキーだ。思ふまゝにして暮してゐる。今私にとつては何も問題ではない。見つけられるなら見つけられてもいい。捕縛されるなら捕縛されてもいい。冷やりする夕方だ。幻のやうな月が、露出な工場の煙突の上に輝いてゐる。月光が屋根に流れて、眠むさうな影がひろがつてゐる。町は眠つてゐる。が、私は眠れない。

私はエレーナのことを考へてゐる。彼女を愛することが出来、愛の爲めに殺すことが出来たのが、今私には不思議だ。私は記憶の中で、彼女の接吻を蘇生させたい。併し、記憶は詐で、何の歡びも、何の興奮も與へない。言葉は退屈に響き、愛らしい手は倦怠だ。愛は夕の光のやうに過ぎ去つた。再び薄光、再び魯鈍。

私は、何故私は殺したか？と自ら問ふ。死によつて何ものかを得たか？おゝ、さうだ、私は殺すことは許すべきだと信じてゐた。併し今は私は悲しい。私は彼を殺したばかりでない、同時に愛も殺したのだ。そして秋は愁はしげに見え、死葉は落ちてゐる——私の失はれた日の死葉が。

九月二十五日。

今日私は偶然新聞を手にして、小さく組んである一節に行き當つた。「警官等は昨夜ベトロヴァ夫人を逮捕せんが爲めに、彼女の宿泊せるグラント・ホテルに赴いた。戸を開かんことを彼女に要求したのに答へて、一發の銃聲があつた。戸を破壊して入れる警官等は、未だ温味の籠れる自殺體を見出した。目下取調中。」

ベトロヴァと云ふ假名で、そのホテルに滞在してゐたのは、エルナであつた。

九月二十六日。

私はその顛末をすつかり思ひ浮べることが出来る。夜の明け方に、戸に叩音があつた——高い叩音ではない。彼女は淡い眠りに入つてゐたので、すぐ目が醒めた。それからまた叩音があつた——こんどは前より高くつてもつと執拗だ。彼女は物靜かに髪をつくろつて、寢床から起上つた。灯りを點けやうとしないで、洗足で、ピアノの傍の右手の大きなテーブルのところへ行つた。手

さぐりで、音を立てないで、抽斗から拳銃を取出した。私はその拳銃に覺えがある。彼女にそれを贈つたのは私だ。三度び叩音があつた——お終ひだ。着物を着かけて、彼女は窓の側の片隅へ衝き進んだ。暗い窓掛を引いて、雨に濡れた狭い登石の廣庭を見た。星はなかつた——下のランプのぼんやりした光だけだ。警官等はもう破つて入りそうになつてゐた。彼女は戸の方へ向いて、素早い、しつかりした舉動で、拳銃を彼女の胸の、心臟の上に、裸の肉に押し當てた。彼女が片隅に仰い向て仆れてゐるのを彼等は見出した。拳銃は、絨氈に黒くその隈をとつてゐた。それからまたすべては闇黒と靜寂に返つた。

そして今、この瞬間に、生きてゐたまま、彼女が私の部屋の戸のところ立つてゐるのを、見ることが出来る。彼女の髪は亂れて、青い眼は曇つてゐる。

「あなたはわたしのところへ来て、ジョーヂ……来ない？」と囁きながら、彼女の弱々しい體は顫えてゐる。

*

*

*

*

*

*

私は今日街を歩いた。會堂の上の十字架は輝いてゐた。鐘は夕の禱りを告げて、憂鬱に鳴り響

いてゐた。街は騒音と喧噪に満ちてゐた。すべてが非常に親しく見えたが、非常に遠くも思はれた。ヴァニアが知事を殺した場所(後)は處だ。その、下手の路次で、フェドルは死んだ……私がエレーナと會つたのはこゝだ……この公園で、エルナは泣いた……すべては過ぎ去つた。そこには嘗て焰があつたが、いまは最後の煙が消えがよつてゐた。

九月二十七日。

私は生活に疲れてゐる。今日は昨日とすつかり同じで、昨日は今日と同じだ。同じ乳白色の霧、同じ灰色な日々の生活。同じ愛、同じ死。人生は、古いがたがたな家と、平べたい家根と、工場の煙突のある、狭い通りのやうだ。石の煙突の黒い森。

または、それはみんな操芝居ではないか？幕が上がると、私達はみんな舞臺の上にある。青ざめたピエローはピエロツトを愛する。彼女に永遠の愛を誓ふ。ピエロツトが他の戀人を持つ。玩具のピストルが鳴る、血——赤桃の汁なんだ——が流れる風琴がキーキー鳴る。幕。

それから二番目、人間の追跡だ。彼は雄鶏の羽のついた帽子を被つてゐる。彼はスイス艦隊の

大將だ。私達は赤いマントと假面をつけてゐる。リナルドー・デイ・リイナルデイニが私達と共
にゐる。銃騎手が私達を追跡するが、捕へられない。ピストルがまた鳴る。風琴がキーキー鳴
る。幕。

三番目、アソス、ボルソス、アラミスの三人の歩兵が舞臺にゐる。彼等の上衣に酒が跳ねて
ゐる。手にはボール紙の劍を持つてゐる。飲んだり、接吻したり、歌つたりする。時々彼等は人
を殺す。アソスの勇氣に抗ふ者があるか？またはボルソスの力に？それともアラミスの狡智に？
大團圓。風琴は勇しい進行曲を鳴らす。

上出来だ！廊下の客も仕切の客も喜ぶ。役者は受取仕事をして仕舞つた。三角の帽子や雄雞
の羽で引きづられて、箱の中へ投げ込まれる。操絲が絡み合ふ。リナルドー大將はどれだ？戀
したピエローはどれだ？誰がちよつとでも區別がつくか？さよなら、また明日。

今日は私はヴァニア、フェドル、そして知事と共に舞臺に立つてゐる。血が流れてゐる。明日
はまた私は引出されるだらう。銃騎手が登場してゐる。血が流れる。一週間すると、また大將、ピ
エロツト、ピエローがあるであらう。血が、——實は、赤桃の汁が——流れてゐる。

人はその中に意味を見出すであらうか？ 私は鎖の輪を求めてゐるのか？ ヴァニアは神を信するか？ ハイリンヒは自由を信するか？……あゝ、否世界は確かにそれよりはもつと單純だ。退屈な廻轉木馬はくるくる廻つて居り、人々は蛾のやうに灯に向つて飛ぶ。彼等に焰のなかで死ぬ。實際、それはすつかり同じことではないか？

私は倦怠してゐる。日は來ては去る。風琴は舞臺の後で鳴り続けるであらう。ピエローは退場するであらう。見物に來い——それは公衆に開けつ放した。

私は昨年の秋の、海岸の一夜を思出す。海は懶げに歌つて、靜かに岸に匍ひ寄り、それを侵してゐた。霧があつた。邊際はすつかり白い霧に塗りつぶされてゐた。彼は空に溶け、岸は水に溶合つてゐた。じめじめした水氣を含んだ霧が私を包んでゐた。私は鹽氣のある濕りを吸つてゐた。私は水の騒音を聞いた。一つの星も、一條の光もなかつた。透き徹るやうな闇黒が私を取巻いてゐた。

今がちやうどそれと同じだ。目につく輪廓もない、終りもない、始めもない。それは歌舞か、それとも劇か？ 赤桃の汁か、それとも血か？ 操芝居か、それとも生活か？ 私は知らない。誰が知

るか？

十月一日。

私は町を去つた。昨夜私は停車場へ行つて、機械的に列車の坐席に就いた。緩衝機は騒がしく鳴り、彈機は突出してゐた。機關車が汽笛を鳴した。灯が急がしく輝き通つた。車輪は速く鳴り響いた。こゝには秋の泥がある。朝は陰氣だ。河の水は鉛のやうだ。河の向ひに、霧の中に一つの影がある。尖塔の影だ。

三時に日の光りが消えて、街の灯が入る。咆哮はなぶやうな風が海から來て、河は花崗石の堤に激しい音をさせて立ち登り、洪水の恐怖がある。

倦怠してゐる。そこには十字架がある——こゝには兵隊が居る。僧院と兵舎……私は夜を待つてゐる。私の時は夜來るのだ——埋没平和の時。

十月三日。

私は昨日アンドレー・ペトロヴツチに行き合つた。彼は私を見て喜んでゐた。眼は微笑してゐた。彼は私を停めないで、注意深くついて來た。

私は彼を見やうとしなかつた。私は仕事のこと、彼と話し度くはなかつた。私は彼の云はうとしてゐる事はすつかり——彼の常識の御談議はすつかり——知つてゐた。私は歩調を伸して、路次へ曲つた。彼は私に追付いた。

「歸つて來たね、ジョーヂ？」と彼は云つた。「神よ感謝する。」

そして激しく彼は私の手を振つた。

「居酒屋へ行かう。」

常のやうに、ぼろぼろの蓄音機は嗚聲に鳴つてゐた。給仕は前後に走つてゐた。煙草のけむり、アルコール、食ひもの、ビールの強烈な匂ひが、私をいらいらさせた。

「僕等は非常に君を必要としてゐたよ、ねえ、ジョーヂ。」

「え！」

彼は神祕的に囁いた。

欠

欠

みぢめであつた。

十月四日。

私は、私が生に疲れてゐることを、知つてゐる。私は私の言葉に、私の思想に、私の欲求に疲れてゐる——すべての人と彼等の生活に疲れてゐる。彼等と私の間に障壁がある。世には聖い境界がある。私の境界は赤く汚れた剣だ。

小供の時に、私はよく太陽を眺めた。それは私を眩惑し、きらきらする光で私を焦した。小供の時に、私は愛を知つてゐた——私の母の優しい愛情。私は無邪氣にすべての人を愛し、生の歡びを愛した。今、私は誰をも愛さない。愛したくない。愛することが出来ない。生活は、ほんの一時も、私には呪ふべき空虚なものになつて仕舞つた。すべては虚偽だ。すべては虚飾だ。

十月五日。

欲求があつて、私は私の仕事を成し果げた。今、その欲求は過ぎ去つた。何故私は何事かを爲

さなければならぬか？ 舞臺の爲めにか？ 操芝居の爲めにか？

私は「愛せざる者は神を知らず、神は愛なればなり」を思出す。私は愛してゐない。そして私は神を知らない。ヴァニアは知つてゐた。彼は實際知つてゐたか？

更に、「見ずして信する者は福なり」を。信する——何を？ 禱る——誰に？……私は奴隷の禱りを欲しない……キリストがその福音で世界を輝したと假定せよ。私は清らかな光を欲しない。愛が世界を救ひ得ると假定せよ。私は愛を欲しない。私は獨りだ。私は退屈な操芝居を離れやう。そして天において一つの殿堂が私に開かれやうとも——私はなほ云ふであらう。すべては虚飾ですべては虚飾だと。

ほがらかな、そして愁はしげな日だ。河は太陽に輝いてゐる。私は、その廣大ななめらかさ、深い静かな水の床を愛する。憂鬱な入口は海の中へ死んで、紫の天空が燃えてゐる。水の飛沫に悲哀がある。樅の梢は靡いてゐる。樹脂の匂ひがする。星が出て秋の夜が落ちた時に、私は私の最後の言葉を云はう。私の拳銃は私と共にある。終

(蒼ざめたる馬)

大正十三年五月十七日印刷
大正十三年五月二十日發行

(定價一圓二十錢)

翻譯者 青野季吉

發行者 東京市牛込區天神町六番地 森孫一

發行所 東京市牛込區天神町六番地 隨筆社

振替東京六六〇七九
電話牛込三四番

印刷者 堀修造

東京市牛込區天神町六番地

印刷所 合資社會大盤社

東京市牛込區天神町六番地

黒馬を見たり

ロープシン作
黒田乙吉譯

——直接露語から譯した小説——

この小説は「蒼ざめたる馬」の姉妹篇で、本年出版された新作である。サウエート政府に反抗せる作者及び周圍を活寫したもので、戀あり、戦ひあり、惱みあり、行文亦精彩奕々たるはいふまでもない。近時の翻譯界にこれ程の優れた、力のある、恐るべき、同時にまた面白い小説は類を見ないと思ふ。敢て、一讀を薦むる所以である。

定價 六十錢
郵税 六錢

東京 隨筆社出版部

122
236



終